

旧大川小学校校舎について

2016年7月 小さな命の意味を考える会

小さな命の意味を考える会

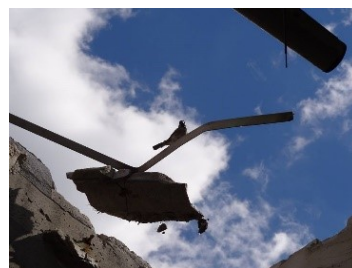
大川小学校で起きたことについての検証、伝承、そして想いを多くの人と共有する目的で作られた任意団体。2013年11月、ホームページを作成し、当時行われていた「大川小事故検証委員会」に意見書を提出したのが活動の始まりです。2015年3月の防災世界会議でもフォーラムを行いました。

国内外から寄せられる様々な情報やメッセージもふまえ、主にHP等による発信、他団体との交流を続けています。求められれば現地の案内もさせていただきます。

2016年3月、校舎の保存が決まりました。これから、何をどう伝えていくかを検討することになります。私たちの会では次のようなスタンスで伝承を考えています。

※ 詳しくはHPでも随時発信していきます。 <http://311chiisanainochi.org/>

1 検討するにあたって



東日本大震災は、広い範囲を津波が襲いましたが、あれだけの規模でその痕跡をとどめている場所はもう大川小以外にないと言っていいでしょう。

(1) 向き合いにくさ

震災遺構の保存、伝承については、地域ごとの様々な状況をふまえた十分な検討が必要だと考えます。とりわけ、大川小学校についてはいろんな事情が絡んで、なかなか向き合いにくい状況にあり、これまで市の遺構検討委員会でも検討の対象から外されてきました。このことが大きな特徴です。学校管理下で過去最大の犠牲者を出してしまった事実はけっして忘れてはいけないと同時に、最もなかったことにしたい事実でもあります。あれが夢だとしたらどんなにいいでしょう。誰もが思っています。

だから、これまで対話が不足して、他の伝承と比べてビクビク、コソコソ進められている印象になっています。そうした中で、中高生が勇気をもって意見を発表したことは特筆されます。

あの日までの、きれいな校舎、子ども達の笑顔や歌声を、覚えていてほしいです。あの日まで、楽しく学び遊んでいた命が、たしかにあったのです。

そして、そんな学校の管理下で多くの子どもの命が失われてしまったということ。

守るべき、守ってほしかった、守れたはずの命です。どんなに寒かったか、どんなに怖かったか、どんなに生きていたかったか…。そんな命があったことを、一緒に黒い波に飲まれた先生方の無念さとともに、忘れることなく、しっかり語り継いでいかなければなりません。

(2) 伝承の方向性

前例のない大惨事の後には、前例のない悲しみ、前例のない事後対応が続いています。ですから、大川小は前例のない震災遺構となっています。特に誰かがPRしているわけではありませんが、国内外から、大川小を訪れる人はどんどん増えていて、5年以上経っても、なんの表示もガイドブックもない場所に、年間1万人をはるかに超える人々があの地に立っています。最近では、スポーツ選手、芸術家、あるいはその道を目指す若者も多く訪れるようになりました。

管理人もいない、吹きさらしの校舎。でも、校庭にはゴミも落ちていないし、床もきれいに掃除されています。こんな場所になるなんて、少なくとも私は想像していませんでした。ある意味驚くべきことだと思います。

同時に、誰も検討しなくても方向性は示されているのだと思います。

ですから、震災遺構としてあの場所をどう遺すのかは、さほど難しくありません。基本的には極力手を加えない、ということです。順路や以前の写真等を掲示するプレートを設置し、危険箇所を補強する程度で十分です。植樹などは最低限にとどめた方がいいでしょう。もちろん、きれいに整備して、芝生や花のスペースも上手にレイアウトする部分もあっていいと思いますが、メインは現状をありのまま遺すスタイルでいいと思います。南三陸の防災庁舎や門脇小校舎と違って、周囲に町ができるわけではないので、わりと自由にイメージできます。

あとは、遺族や関係者が静かに祈れる環境整備です。

外部から多くの人を訪れることで、学校に足向けにくいという声が多く聞かれます。語り部をしている遺族にとってもそれは同じです。

そうした想いにどう配慮すべきか。遺族の想いや事情はほんとうに様々です。それを吸い上げ対話する形がずっと出来てこなかったこともあり、当事者同士も分からないです。

訪れる方々にきちんと説明をし、どういう場所なのかをしっかりと認識をもってもらうのが最も重要ではないでしょうか。メディアの役割も大切です。

遺族の想いは十分配慮すべきですが、大川小校舎は遺族だけのものではないし、むしろ、遠くの人、未来の人にとっての意義を考えるべきだと思います。今回保存となったのは、みんなでそのことを考えましょうということなのです。壊してしまったら議論できないし、保存・解体は未来の人が決めてもいいのですから。内外の若い世代の声を反映させる体制づくりも必要でしょう。

私たちがガイドするときは、3. 1 1の様子も説明しますが、震災前の校舎や風景、子ども達の様子もイメージしてもらうようにしています。

子どもと先生が、地域の方々に見守られて、笑顔で通っていたことが実感できれば、なぜこうなったんだろう、自分はこれからどうしていけばいいだろうと考えてくれると思うのです。訪れた一人一人にとって意味をもつことが大事です。

2 何を伝えるか

「未来を拓く」大川小学校の校歌のタイトルです。ここは悲しいことが起きた場所ですが、未来を拓く何かが始まる場所になってほしいと願っています。次の4点をバランスよく伝えなければなりません。



①あの日までのこと

ここはあの日まで、楽しく学び遊んでいた学校だということ。

地域の人に見守られて過ごしたたくさんの思い出。

あの日までの風景、町、命。



②あの日のこと

午後2時46分の強く長い揺れの後、3時37分に巨大な津波が襲うまでの事実。時間、情報、手段、救える条件があったにもかかわらず、動けなかったこと。何があったのか事実に基づいた考察。

海から4km近く離れている場所を襲った巨大津波の様子とメカニズム。



③あの日からのこと

地域から多くの子どもたちの姿が消えたこと。悲しみ、喪失感。

無駄にしてはいけないという取り組みとその難しさ。

保存決定に至るまでの経緯（簡単に保存を決めたわけではないこと、卒業生をはじめ様々な意見があったこと、なかなか議論を進められなかった事情）

④これからのこと

この場所をどう遺し、伝えていくかを対話を通して考える。

一人一人がこれからの進む方向性を考える。

失われた命に想いを馳せ、祈り、誓う。

